

(第3種郵便物認可)

塾に英語やスイミングなどのおけいこ事、テレビゲーム…と、「現代っ子」の放課後の過ごし方が様変わりする中、児童館や地域の公民館などを活用した遊び場や居場所作りが各地に広がっている。「自由に学校に集まり、校庭や体育館で遊びませんか」。こう呼びかける宝塚市の仁川小学校区のボランティアグループ「放課後遊ぼう会」もその一つ。異年齢の子どもたちが思い思いに遊ぶのをサポートすること、集団生活のマナーや社会的なルールを自然に身につける機会にもなっているという。

(片岡達美)

放課後の学校 遊び場に活用

同会は昨年七月、同小 助成金などで運営する。館で遊ぶ。

に通う子どもは母親四人、同小の児童のほか、仁川幼稚園の園児や近所を中心に約二十名が発足した。学校と市教委の理解を得て、敷地内のプレハブの一室に拠点を設置。登録。週三、四日、十数人が集まり、校庭や体育

館で遊ぶ。一かつては、行きさえすれば仲間に入って遊べる安全な場所があった」と代表の足立典子さん。宝塚市は、子どもの安全な遊び場確保のため、二〇〇四年度までに七つの児童館を建設するが、同小学校区に予定はない。

そんなとき、大阪市の「いきいき活動」の存在を知った。空き教室や校庭を借り、指導員の下、子どもが自由に遊べるシステム。足立さんらは「ないなら自分たちで作ればいい」と、この活動をモデルにした。

スタート時は一、二年生だけの参加だった。異年齢の子ども同士、どのよつに遊べばいいか戸惑う様子も見られたが、今



昨年12月に行われたお楽しみ会。約100人がエプロンシアターや体を動かすゲームなどを楽しんだ宝塚市仁川宮西町の仁川小学校

宝塚・仁川の「遊ぼう会」異年齢との交流も

では、楽しみに集まるようになった。足立さんは「子ども時代に思い切り遊んだ経験は、成長してからのやる気にもつながるのでは」と、遊びが子どもの発達に果たす効果にも期待する。

目下の悩みは、スタッフが足りず、毎日は会を開けないこと。「他人の子ども遊びを見守ること、わが子も客観視できるようになり、うまく距離感が保てるようになる」とスタッフの一人、秋山藤子さん。保育士でもある秋山さんは、日ごとの経験から、親にとつてのプラス面もあげる。

「地域ぐるみで子どもをばくむ意識や体制を整えていきたい」とい、同じ思いをもつ他の地域の親たちにも「ぜひ、一歩を踏み出して欲しい。私たちのノウハウが役に立つなら、喜んで伝授します」と呼びかけている。

問い合わせは同市ボランティア活動センター
0797・86・5000

